

# 方舟謝肉祭 ⑤

高橋文樹

## Chapter TWO……藍より出でて、藍よりブルー

僕は<sup>インスピレーション</sup>靈感 というものを信じない。創作の神は舞い降りたりはしないからだ。努力という供物をいやというほど重ね、搾り出すようにしてなにかを創作したあと、創作の神は頬笑みながら去っていく。やってくるところは見えない。ただ、いつのまにか側にいたことに後から気づくだけだ。待っていてポツと沸くものじゃないのだ。ただ、「書く」という一番最初の決意だけは、自分でも気づかないうちに生まれるものらしい。それをインスピレーションと呼ぶのなら、同意してもいい。

ぼくは祖母の家からアルバムをぶんどった一週間後、山口県は瀬戸内海沿い、柳井市にあるJR柳井駅に降り立っていた。東京駅から新幹線を使っても約六時間、片道二万円ほどだ。無理をいって貰った八日間のバイト休みを利用して、光降る神々の海に面したこの町で取材をするのである。

連れ立った弟子は「暑いよ、溶けちゃうよ」と漏らしながら、一刻も早くタクシーに乗ろうと、駅前のロータリーを見回していた。

弟子、といきなり書いたが、僕には弟子がいたのである。文章だけで飯を食えない身分のくせに。

彼はDDと呼ばれている。本当は土井内大輔という名前なのだが、高校でヒップホップグループのMCをやっていた頃、DDと名乗っていた。僕の二個下で、弱冠二十三歳の会社員である。会社員といっても、実家が印刷会社で、社長の息子だ。「オフセット印刷」という看板を出しているような零細ではなく、Tシャツのプリントやら、色々と手広く稼いでいる。次期社長もほぼ内定、こんな風に休みを取るのも簡単だ。創業者は彼の祖父だから、『売家<sup>からよう</sup>と唐様で書く三代目』というやつである。まあ、彼はあまり漢字を知らないから、『For Sale』とでも書くんだろうが、これだけは断言してもいいだろう。

彼の代で土井内印刷(株)は終わる。

DDが今回の取材旅行についてくるといいだしたのは、些細なきっかけによる。出かける三日前にかかってきた電話で、僕は山口に行くことを漏らした。はじめは興味なさそうに聞いていたDDだったが、山口の名所の話になって、山口市湯田に中原中也記念館があることと、美和町が芥川竜之介の実父新原敏三の出身地であることを、僕がうっかり漏らしてしまうと、がぜん行く気になった。彼は文豪ゆかりの地に行けば小説が上達するという、素朴な巡礼信仰の持ち主だった。

まあ、僕は僕で貧乏だから、同行者がいた方がレンタカーも安くすむ。ソロバンを弾いた結果、お師匠様は同行のお許しを与えたのである。

「なんか蒸しますね。早くタクシー乗っちゃいましょうよ」

DDはそう言うと、斜にかぶったキャップを脱いで、額の汗を拭った。キャップには〈Nomad〉と刺繍が縫ってある。

「どこ行くつもりだよ。それより、レンタカー借りればいいだろ」

「だってレンタカー借りるところ見つからないっすよ。タクシーで頼めばお店まですぐじゃないっすか」

「おまえ、小説家に向いてないよ」

僕はそういって、公衆電話に向かった。ハローページで住所を調べる。地図で照合する。これで一丁上がりだ。この世界では、調べればほとんどのことがわかるようになっていいる。これが取材力というものだ……と、ボックスを出れば、DDはいない。辺りを見回すと、JRの改札からへらへらと出てきた。

「駅員さんがあっちっていったすよ」

「いったすよ、ってなんだ？ 田舎の百姓みたいな話し方だぞ」

「マジすか？ 田舎の百姓ってこうやって話すんすか？」

「いや、知らないけど」

僕は彼がウンコたれな同行者だと思いつつ、レンタカー営業所へ向かった。借りた車は九十一年式のアルトで、ステレオもパワーウインドウもついていなかった。DDは手動で窓を開けるのが面白いらしく、開けたり閉めたりを繰り返した。

「すげえ田舎っすね！ なんか家畜の匂いするっす！」

DDはふわふわへアーを風になびかせて、感心することしきりだ。

「金町だって大して都会じゃねえだろ。下町もいいところじゃないか。自分が下だからって、下ばっか見るなよ」

「それもそうっすね！ あ、あの病院見ました？ ウケるくらいボロい。肝

試ししてえ！」

DDはそう言つて奇声を上げた。僕は彼と来るべきではなかったとふてくされながら、一向に回転数の上がらないエンジンを酷使すべくアクセルを踏みこんだ。

阿月という町は柳井駅から車で四十分ほど離れた場所にあつた。町など自称するのはあまりにも田舎者の見栄っ張りじみていて悲しくなるからいつそやめないか、と町長に忠言したくなるほどの漁村だ。瀬戸内海に突き出た堤防の付け根にそびえるスピーカーは、早朝の出漁を知らせるサイレンのためだろう。ヴーとけたたましく鳴るだろう音は、千葉の館山近くだったか、静岡の戸田辺りだったか、どこかのひなびた町で聞いたことがあつた。

と、例によつてあしざまに田舎の風景を描写していると、DDがこちらに無邪気な尊敬の眼差しを向けている。

「Fさんつて海の男だったんすね！」

「なんだよ、いきなり。俺は真正正銘の郊外住宅育ちだぞ」

「でもたぶん似合うつすよ。ほら」

DDはそういうと、助手席を降り、海とぼくを結ぶ延長線の上に立った。「ほら、こうやつて海をバックにすると、メチャ似合ってるつすよ。ちつすよち」

「なんだよ、ちつすよちって」

「だからちつすよ。ほら、こういうところに流れてるじゃないつすか」

工員とは思えないほど華奢なDDの腕に浮き出た静脈を見て、ああ血か、と気付く。

「血だけじゃどうにもならないよ。向き不向きは小さい頃からの教育で決まるんだ。そういう先天的なものでどうにかなると思つてると、怠け癖がつくぜ」

「でも向いてると思うんだけどな。Fさんつて、どう見てもガテン系つしよ。」

日焼けして、ハチマキ巻いたら、おわ、はまるわ」

「なんだよ、俺つて小説家に向いてないか」

「向いてるつすよ。漁師やりながら小説家もどうかって話しつすよ」

「嘘、じゃあ俺つて小説家に向いてる？」

「めっちゃめっちゃ才能ありますよ」

「おまえのそういうとこ、ほんといいよ思うよ」

「まじつすか。じゃあ百万円下さい」

こんな無駄話を重ねている間に人生は終わって行く。

僕は車を降り、地図を眺めた。母から聞いた住所ではこの辺だ。絶縁状態

だったミツムネ氏の電話番号は聞けなかった。氏が祖父の告別式に来たのも、新聞の訃報欄を見てのことらしい。手紙を書くのもまだるっこしいと直接来てみたのだが、住所で辿り着けるのはここまでのようだ。住所の示す範囲はあまりに広い。一応、この先にそびえる山にミツムネ氏の家、つまり宗おじさんの家はあるはずだった。

細い山道の入り口には農協があった。そこで尋ねようと側まで寄ると、閉まってはいたものの、駐車場には呆けたように打ち水に耽る老人がいた。

「すいません、この近くに後藤さんの家はありませんか」

「ああ？」と訊き返した老人は、不思議そうにこちらを眺めている。僕ははたと思い当たり、「松永」という本来の姓を告げてみた。すると、老人は急にさき敏い目つきになって、こちらを見返した。

「ここまっすぐいったらすぐじゃのんた。一軒しかないけえ、すぐわかるよ」  
山道は車で入れそうにない。ここに駐めていいかと尋ねると、老人は快諾してくれた。

「あんた、東京者か」

「そうです。その家の親戚なんですよ」

老人は「はあ、親戚」とおうむ鸚鵡返しにして、麦藁帽子の影に表情を隠した。ややあって覗いた目は、きつい日差しを憎むようにぎらつく。気圧された体で続く言葉を待つと、「あそこの家は断絶したんじゃないか？」と出た。「いや、そういう話は聞いていませんけど。第一、ここに僕がいるわけですし」

老人は何もいわなかった。何かまずいことをいったらうか？ただ事態を打開するため、「じゃあ、僕は幽霊ですかね」と足を叩いてみた。老人の顔は笑いの予兆にひきつるものの、決して笑いはしない。僕の足をそっと掴み、「どうやら幽霊じゃないけんね」と呟いただけだった。

ただでさえ妖怪じみた老人の薄気味悪い対応に、後味悪く山道へ入った僕らは、これといった話もせず山道を進んだ。いつもはうるさいDDも黙っていた。

地図によると山道は大星山へと至る。標高四五〇メートルほどの小さな山だ。事前の調査では、この麓の村のどれか一つで、発狂した青年による村民皆殺し事件があったと聞いた。あの『八つ墓村』のモデルになった「津山三十人殺し」と似たような猟奇的事件だ。血生臭さの予感があった。深々と蝸の声が染み渡る山道を歩いていると、DDの神妙さも確信めいて見えるから

不思議だ。僕は次第に昂揚してくる冒険家の気分で、舗装もされていない急勾配の道を歩きつづけた。

十分ほど歩いたろうか、振り向くと海辺が少し遠くに見えるあたりになって、人家の気配がした。荒れ放題の山道に、人の手が入った草味がぼつねんとある。よく見ればそれは畑で、素人仕事丸出しではあつたけれど、形の悪いスイカやらキュウリやらがなっていた。

「ここつすか？」と、DDは畑の間を飛ぶ熊蜂に怯えながら尋ねた。

「たぶんそうだろ。違ったらまた聞きやあいよ」

割合に広い畑を抜けて小さな用水路をまたぐと、玄関だった。表札は出ていない。おそらく鍵はかかかっていないだろう。引き戸を開け、「ごめんください」と大声を出すと、DDは「いいんすか」と驚く。

「なんだ、おまえ本当に何も知らないんだな。田舎ではアリなんだよ。人と人との距離が近いんだ」

「へえ、なんか鬱陶しいっすね。いつでも入ってこれるんすか。彼女とエツチしてるときになんかこられたら……」

DDはいつも間が悪い。ちょうど「エツチしてるとき」といった頃、家人が出てきた。三十ぐらいの女だ。いかにも部屋着といった短パンとタンクトップで、膝をついて座る。曲げたせいで張った太腿は、たぶんDDの視線を釘付けにしているだろうと思つたら、やっぱりDDは凝視している。女は田舎生活による無邪気のせいか、それには気付かず、僕らを認めた瞬間から不思議そうな表情を崩さずにいた。

「突然でもうしわけありません。僕はですね、荻窪の家の孫なんです」

女は「はい？」と首を傾げ、わからない様子だ。

「こちらは松永さんじゃありませんか？」

女は「あー！」と得心した様子で、僕らを待たせた。しばらく経って、八十ぐらいのお爺さんが出てきた。ポリウムに乏しい長白髪を後ろで束ね、それに引つ張られたような釣り目だ。グレーのスウェットにだらしなく身を包んでいるが、おそらくは昔に格闘技をやっていたのだろう、ガニ股の、這うような歩き方だった。

「松永さんの？」と、老人は見下すように言う。

「はい。なんと言いますか、宗光さんの大甥に当たります」

男は「ああそう」と笑うと、上がるよう勧めた。咎めるように僕を見るD

Dを尻目に三和土たたくを上がると、広々とした居間に通された。開け放した襖ふすま

の向こうには、仏壇のある部屋。あるいは、宗おじさんの仏壇だろうか。そ

れにしても、ミツムネ氏は？ 疑問は多かったが、それは今から解いていけばいいことだ。

僕とDDの自己紹介を待って、男の話があった。男は紀和治夫といって、ミツムネ氏の知人だそうだ。さる事情から何十年前前にこの家を譲り受けた。紀和氏は若い頃に立ち上げた事業を人に譲って第二の人生を送ろうと思っていた矢先だったので、大変ありがたかったという。

退屈な自己紹介が一段落したところで、さっきの女がお茶を持って来た。僕が説明を求めるように紀和氏を見ると、彼は誇らしげに小指を立てた。

「へえ、羨ましいですね。年の差は？」と、DDが急に元気になる。

「五十ぐらいじゃのんた」

「うわ、羨ましい！ 秘訣教えてくださいよ」

口を挟んだ女の、「優しいことね」という言葉には、外国人特有のアクセントを持っていった。たしかに涼しげな美人ではあったけれど、よく見れば、いわゆる大陸系の顔だ。

秘訣も何もあるか、どうせ熟年離婚されたしがないジジイが、実家への送金をもくろむ中国女にひっかかっただけだ……と、僕は意地悪く思ったりするのだが、DDはこういうことになるのと俄然興味を示し、あれこれと持ち上げつつ質問を浴びせる。そのせいで紀和氏の女性論が始まってしまった。

内容は割愛するが、僕の想像はまったく当たっていたといっている。出会いはスナックだったそうだ。聞きもしないのに饒舌だった紀和氏は、さかんに若い奥さんを貰うことの効用を説いたが、それもある種の不安からだろう。本当に自信のある人間は、他人に説明する労を厭うものだ。

「それで、F君はなんで来たんじゃ？」

DDのおだてにすっかり気を良くした紀和氏は、やっと本題を思い出したというように、僕へ語りかけた。僕は取材旅行とそれらしい名目を口にした。

紀和氏は「若いのに大層なもんじゃ」と笑う。

「いえ、まだまだ勉強不足なもので……」

「あ、それじゃ、ミツムネさんな。あやつは今、光にいるけえ、連絡を取っちゃろう」

紀和氏は上がりかまちにある電話へ飛びついた。喋りだした当初は方言がきつすぎて意味がわからなかったが、どうやら僕たちがそちらに行く段取りを決めているようだ。ただ、どこか横柄な様子が気にかかる。

「晩は用があるけえ、明日でもいいかっちゅうとる。泊まる所は？」

紀和氏は受話器も置かず尋ねた。

「まだ決めてませんが」

「じゃあ、泊まってる。二人暮しには広すぎる平屋じゃのんた。布団はちいと黴臭かびいが……そうじゃ、ウー、布団を今から干してきちよくれ」

「はいよ」

ウーという唸り声のような名前と呼ばれた中国女は奥へ引つ込んだ。まだ返事もしていなかったが、あまりにさくさく決まってくたので、僕は礼も言わずにいた。使っていなかったらしい客間に通される途中、廊下の突き当たりに見えた寝室にはダブルベッドがあつて、そのいやらしいサテンのシーツを輝かせていた。八十を過ぎてもできるんだらうか？

客間に通された僕らが半ば途方に暮れたようにして荷物を説いていると、側で見守っていた紀和氏が口を開いた。

「のおた、ちいと観光でも行くか？ で、そのあと飯にしよう」

「いいんですか？ 急に押しかけてきたのに」

「なんもなんも。私は若者が好きなんじゃ」

「でも、お礼できるようなことは何も……」

「そう怖がらんと。私は人に会うのが好きなんじゃ。よし、じゃあすぐに行こうかい。もう玄関で待ちよるからな」

紀和氏が暴風雨のようにして去った後、僕はDDとここそこ話した。一体、彼らはなぜここまで親切なのか？ DDはそれを田舎特有のコミュニケーション・スタイルと思っていたが、悪評高いミツムネ氏の仲間だと考えると、気は許せない。もつとも、ボンボンのDDはともかく、僕には取られるものなんてほとんどなかったが。

「とにかく、あんまり粗相がないようにしようぜ。あとあと困るかもしれないし」と、僕はDDに囁いた。

「大丈夫つすよ。俺、そういうのメチャ得意つすから」

「たしかに。おまえは人に取り入るのうまいからな」

「任してくださいよ。ちよろつと夢中にさせますから」

「悪魔か」

そんなこんなで、「あまり世話になりすぎない」という曖昧な方針を決め、玄関へ向かうと、再び電話にかじりつく紀和氏の姿があつた。とはいえ、先ほどと打って変わった恐ろしく丁寧な姿勢で頼みごとをしている。お辞儀が終わるのを待って話しかけると、これから釣り舟に乗るということだった。

「観光ちゆうけど、近くに見るようなもんはないけえ」

紀和氏はひつつめ髪を揺らしながら、照れたように笑った。

ウーは、これから仕事に出るとか何とかで同行しなかった。僕とDDと紀

和氏の三人で農協前の駐車場まで戻ると、先ほどの老人が日陰で座り込んで  
いる。老人は僕らを認めると、軽く会釈をした。せつかくだから礼をいおう  
と側によると、紀和氏は「F君早くきい」と先に行ってしまう。なんだかな、  
と老人に会釈を返し、僕は紀和氏を追った。

「こつから近いんですか」と、DDが尋ねた。

「すぐじゃ。車で行くとえらいうるさいんじや」

「すいませんね。急に押しかけた上に船にまで乗せてもらえるなんて」と、  
僕。

「ええ、ええ。どうせタダみたいなもんじやけえ」

僕は恐縮しきったふりをしてDDを見た。DDは釣り舟に乗るのがはじめ  
でだとかいって、大騒ぎしていた。

小さな漁港の手前で老人が一人待っていた。僕らの姿を認めて一度引っ込  
む。辿り着いた頃には、もう釣り竿を持って待機していた。紀和氏は丁寧に  
それを受け取ると、「ほれ、あんたらもお礼」と急かした。これからいおうと  
思っていたのに、と内心ふてくされながら、僕は礼をいった。DDは釣り竿  
をまじまじと眺めたまま、「サンキューです」と呟いた。

老人は船長らしく、僕らを船に案内した。紀和氏と何か交渉しているよう  
だったが、それが何かはよく聞き取れなかった。

時刻は四時を回っていたから、夏とはいえ陽はだいぶ傾いていた。太陽を  
背にして船は進む。高齢の船長は魚影をモニタリングする装置を眺めていた。  
今のところ、この町に若者がいない。紀和氏が若者と話すのを好きなもの、  
案外本当なんだろう。

「ここいらじゃな」

船長はそう一人ごちると、エンジンを止めた。穏やかな瀬戸内の波にくす  
ぐられながら、船体はかすかにきしむ。紀和氏があればこれと出す指示に従い  
ながら、僕は釣りに耽った。メバルやアジが山ほど釣れた。撒き餌に魅せ  
られた魚達は、もはや餌のついていない針にさえ食いついた。DDは「こい  
つら馬鹿だなー！」とはしゃいだ。自分のことは棚に上げて。

「もうええじゃろ」

一時間もたった頃だろうか、船長は一方的に釣りを打ち切った。釣り糸を  
巻き終える前にエンジンがかかる。

「もう終わりっすか？」と、DD。

「もう十分だろう。こんなに食いきれないよ」

僕はそう言っただけでDDに船倉の魚を示した。軽く三十匹はいる。

「うわ、すげえ。ビギナーズラックっすかね。俺ちよつと釣り好きになっち

やいましたよ」

「市ヶ谷だっけ？ 釣堀あったろ。あそこ通えよ」

「いやあ、やっぱ海釣りっす。海釣りサイコー！」

DDが叫んだとき、船長は少し笑みを見せたが、それきり陰鬱な表情に戻ってしまった。排斥するような態度は、僕らのせいなのか、それとも紀和氏のせいか。

その晩、僕らは柳井駅の近くまで出て、紀和氏の経営するというスナックに向かった。町並みはいかにも場末という感じで、シャッターの閉まっている店も多い。高齢化プラス不況で、このシャッターが開くことはもうないだろう。繁華街というにはあまりに寂しいこの町で、紀和氏のスナックは控え目なネオンを輝かせた。

「中国女」というゴダールもずっとこけるような赤い看板の下をくぐると、本当に中国女ばかりが出迎えた。「イラシャイマセー」とか、「シャチャョー」とか口々に片言の日本語が出てくる。

「おい、これ唐揚げにしろ」

紀和氏はメバルとアジのつまったビニールを中国女の一人に渡した。女は「ママさん」と甘ったれたような声でカウンターの裏の厨房らしき場所へ消えた。

「すごいっすね。店人中、真っ赤じゃないっすか」

「赤、なんちゅうと儂らの頃はいろんな意味があったんじやが」

「なんすか、共産革命とかっすか。熱いっすね」

かつて風俗嬢スカウトのアルバイトをしていた頃はぜんぜんキャバクラを好きじゃなかったくせに、会社員になったとたんキャバクラ命になったDDは、水を得た魚というか、キャバクラに来たブルーカラーというか、我が意を得たりとはしやぎだした。

「女の子つけてもらってもいいですか？」

「もちろん。そのつもりで連れてきちよんじやけえ。気に入った子いたらいいよ。F君もな」

「はあ。ウーさんもここにいるんですか？」

「ああ、そうじゃそうじゃ」

紀和氏は「ウー！」とけたたましく叫んだ。店内にまばらだった客達がつせいに振り返る。厨房の奥からチャイナドレスを着たウーが、結い上げていた髪を解きながらいそいそと出てきた。深いスリットから覗く太腿は、またしてもDDの視線を釘付けにしている。

「呼んだ？ 何よ」

「二人を連れてきちよるよ」

「あそう。唐揚げの途中よ」

そして、ウーはそつげなく厨房へ。紀和氏は「チャイナはなんでここのかのと苦笑して、僕たちに水割りを勧めた。

「この店はもう何年ぐらいになるんですか？」と、僕はいかにも取材風に始めた。

「そうさな、かれこれ二十年」

「その頃からずっとチャイナで行くと決めてたんですか？」

「もちろん。あん頃から外国人がずいぶん増えたけえ。どうせ募集かけちゃうても、ここの辺に若い子なんてくるわけなかった」

「でも中国人なら来るってわけでもないでしょ？」

「それが来よる。全国紙の求人広告に一回だけ出したんじやよ。そうしたらもうワンサカ。タイとかピリピンとかの女も国籍偽ってきた。どう見たってバレバレじやのに。まあ、仕事に飢えてたんじやろう」

「慧眼ってやつですね」

「のおた、口が上手いの」

ウーがメバルとアジの唐揚げを持ってきたあたりから、紀和氏は酔いが進み、ずいぶんお喋りになった。お決まりの転落人生を歩み、ひよんな出会いから「事業」とやらをやるようになったとのこと。はじめは岩国でサラ金を開業して財を成したが、暴力団に目をつけられるようになると、すばやく会社を転売し、共同出資で土建屋をやった。それも権利を人に売ってしまい……と、一事が万事その調子で、あちこちを転々とした。大阪で商売をしたこともあるし、福岡の中洲に店を出したこともある。収支はいつもトントンだったが、浮沈の激しい人生は楽しかった。離婚も二度経験した。子供も二人いて、孫は三人いる。柳井は静かでない所だ。知っちゃるか？ 山口県にある瀬戸内沿岸の町で、工業都市じゃないのは柳井だけなんじや。

キャリアを不満のまま終え、本当の意味での老いに差しかかっている人間の、抑えがたい自己肯定欲求に支えられた回想録。一流の非熟練労働者である僕は、リストラ組の末路のような場所でも働いたことがある。その類の回想録はもう耳タコだった。

とはいえ、生まれ持った性格の悪さのせいかな、僕はこういう太鼓持ち的な会話を得意としない。ついつい、ツッコんでしまいたいところだ。「そんなご立派なものじゃないでしょ」という具合に。こういうのは、DDの方がずっと得意だった。しかし、肝心のDDは、チャイナパブの魅力に取り付かれ、

ホステスたちと楽しげにはしゃいでいた。しかたなく、僕はマンツーマンで紀和氏の回想録を拝聴した。

長い、長いループ。

なぜ転落人生を歩むようになったのか、また、なぜミツムネ氏と知り合ったのか。一番大事なその二点を語ることなく、紀和氏は眠りについた。

「あらあら、ごめんね。ちよつと待っていてね」

ウーは紀和氏を空いたソファに寝かせ、いかにも中国風な扇子で扇いでいた。僕は仕方なしに、ハイテンションのDDに合流した。中国娘達は快活で、質問にはいくらでも答えてくれた。中国では人前で裸足になるのが、裸になるのと同じくらい恥ずかしいということ。中国娘達がそろいもそろって福建省出身なのは怪しいということ。彼女達は誰も魯迅を読んでなかったこと。または「アイヤー！」という言葉の正しい発音について。ぼくらはいろんなことを学び、そして、そのどれもがどうでもいいことばかりだった。

十二時を過ぎても紀和氏は目覚めなかった。僕とDDはいわれるがままに、紀和氏を奥の控え室へと運んだ。

「もう朝まで起きないね。どうする？」

「どうするって言われても……なあ」と、DDに尋ねるが、「なんですかー、朝までいっちゃいましょうよ」と取り合ってもらえない。山口くんんだりまで来て、その日に徹夜はごめんだ。

「朝まではやってないよ。田舎はみんな早起き」

ウーの言葉にほっとしたが、万策尽きたことに変わりはない。どうしたものかと思案顔をしてみせると、その表情は万国共通だったのか、ウーが「寮に泊まればいいよ」という。

「寮ってホステスさんの？」

「そうよ。たくさん人いて楽しいよ」

「いーじやないっすか。修学旅行気分で」と、DDは奇声を上げた。

零時を回ると、ホステス達が退け始め、僕とDDはその流れに乗って寮に雪崩れ込んだ。アパートを一つ丸々借り切っている。みんなに歓迎されたわけではないけれど、僕たちについていた三人の中国女、リンリン、フェイ、シュンツイエンはだいぶ浮かれていた。僕たちはリンリンとフェイの相部屋に入り、合コンの三次会みたいな雰囲気を共有した。

「Fさんはあ、パンツまでボーダーだからあ！」

部屋に入るなり、DDはそう叫んだ。僕は無理矢理ノセられた挙句に、場の空気が悪くなることを恐れ、ズボンを脱いだ。下はボーダーのトランクス

だ。上はボーダーのタンクトップに半袖シャツを羽織るといふ恰好だったのだ。僕は上下が縞々という異様な恰好になった。

「泥棒みたいよ！」

中国娘の一人、フェイはそういつて笑った。泥棒というより、囚人服のこをいつているんだらう。僕はすかさず、「これは『縞状力学』を表現するために……」と言いかけたが、やめてしまった。日本人相手ならこのあとに「縞状力学」を説明して結構盛り上がるんだけど、中国娘たちの語学力ではそれもおぼつかない。

僕がDDに困ったような視線を向けると、彼はだぼだぼルックの服を脱いで、すでにパンツ一丁になっていた。

「おい、Fさんがここまでしてんだから、おまえらも脱げよな！」

こんな強引な論法は通用しない……とDDに出会うまでの僕も思っていたが、これが不思議なことに通用する。彼の無邪気さがそうさせるのだらう。DDが飛びついて服剥き始めると、嫌よ嫌よも好きのうちといった感じであつという間に下着姿だ。揃いも揃って、三人とも赤い下着をつけていた。

メロウな時間の流れにまかせ、マッサージごつこと称したペッティング大会みたいなものもあり、しまいには二段ベッドの上でDDがフェイに「結婚しよ」と囁く声まで聞こえた。まあ、DDは軽々しくそうやっていえるところがかわいいところでもある。僕はリンリンとシュンツイエンの二人に挟まれ、両手で彼女達の股間をまさぐっている間に寝てしまった。

ちなみに、寝る前に思ったことは二つ。中国女のあえぎ声はでかいということと、こうやっているうちに人生は終わっていくということだ。

八日間しかない休暇の一日目は、わけのわからない乱痴気騒ぎのうちに終わった。

翌朝、自己嫌悪と共に目覚めた僕がDDを急かして寮を出ようとする時、中国娘たちが盛大な見送りをしてくれた。ほとんど全員が海辺のアパートのベランダから僕らを見ていた。どこか垢抜けない部屋着に身を包んだ女達は、細い目をさらに細め、純朴な笑みを浮かべていた。僕たちは「中国女」へと

シエーシエー

向かいながら、謝謝と何度も叫んだ。DDは言いながら「シエー」のポーズをとつたが、それはまるでウケなかった。日中の文化的差異を無視したためにスベったわけだけれど、DDはそれを恥じるどころか、「スベっちゃいました」とどこか嬉しそうだった。

「中国女」へと戻ると、入り口は閉まっていた。しょうがなしにタクシーで

阿月に戻り、紀和氏の家へ戻った。農協の前にはまたあの老人が打ち水をしていた。老人はこちらの会釈には応えず、それが苦しい言い訳でもあるかのような視線を送っていた。ここいらで朝帰りは罪深いのか、それとも別の理由か。

紀和氏は老人とは思えないどっしりした腰の座りで畑仕事をしていた。麦藁帽子とタオルとオジサンシャツといういでたちでキュウリをいじっている。彼は僕らを認め、「遅かったの」と笑った。

「お楽しみじゃったんかい？」

紀和氏は人差し指と中指の間から親指を出す例の手つきをする。素早く反応したDDは近くにあったキュウリをもぎ取って、二本の指で作ったわっかに通した。「そりゃえかった」と笑う紀和氏は、僕に窺うような顔を向けた。

「僕は何もありませんでしたよ。眠くて」

「なんじゃあ、もつたいない。男だったら起きちよらんと」

「Fさんは一途なんすよ」

DDはもぎ取ったキュウリを食べながら弁護した。僕が父に捨てられた母のことを思ってそういうことをしないのだと、彼はよく知っていた。

「ところで、ミツムネさんとは連絡取っていただけました？」

ほんとうはもつと紀和氏に聞くべきことがあったのだけれど、僕はなぜか焦っていた。

「おお、おお。そうじゃった。光の駅で待ちよるっていうけえ、出る前に一回電話していきい」

僕は玄関先まで行って電話を借りた。そして、そのまま家にかかることなく、光駅前の豚カツ屋で待っているミツムネ氏を目指し、紀和氏の元を発った。少々そっけない別れになったことを悔やみつつも、紀和氏の体育会系ノリに怯えるようにして。どうも、ああいう老人は苦手だ。

—— (続く) ——

